

講義科目における参観・ディスカッションの位置づけ

家政教育講座・金子省子

1. 授業科目について

「保育学」は、2回生前期，家庭科免許の必修科目であり，家政専修並びに生活環境コースで家庭科免許の取得を希望する学生が履修する。保育領域についての唯一の必修科目である。本年度単位取得者は25名（家政教育4名，他専修3名，生活環境コース18名）であった。

2. 内容構成

附属幼稚園参観日程に合わせ，日程を一部変更したが，主たる流れは，1.児童学の研究領域・研究方法，2.ヒトの新生児の特徴，3.乳幼児期の心身の発達と環境，4.こども観と育児文化の多様性 子ども観と「母性」観の変化，親役割の歴史性 5.近代家族を対象とした親子関係研究，6.幼稚園・保育所の役割，附属幼稚園での参観，参観をもとにした話し合い，7.子育てと子育て環境—保育学習の課題。最後に，試験を行った。

参観前の回に幼稚園・保育所に関する学習を位置づけ，参観後の報告を作成するとともに，参観後の授業で発表を行う。本年度はこの振り返りの回に，はじめてグループでのディスカッションを位置づけ，第13回（授業公開）においても，子育てに悩む母親の手記を資料として，「自分ならどうか」「どのようなアドバイスができるか」という2つの観点から，グループでのディスカッションを行った。これらは，目標に掲げた「3.今後の保育環境・保育システム，保育学習の課題について，考察することができる。」に主に関連し，発達の基礎知識と子育て環境の歴史性，保育制度に関する基礎的知識をふまえ，子どもとかわる体験や子育て中の親の声をもとに具体的に考え発表し，多様な意見に学び合うことをねらいとした。第13回については，授業公開を行って意見をいただいているが，ここでは，保育参観後のディスカッションを取り上げて検討する。

3. 保育参観

附属での参観後のふりかえりについて，本年度は，「実習生としての自身の行動」，「子どもの様

子からの気づき」，「保育者，保育の物的環境への気づき」の3点について報告をまとめることを求めた。また，従来は2時間程度保障できていた参観であるが，授業時間外での調整のため，近年は1コマとなっている。特に本年度は，体調不良も含め7名が附属幼稚園での参観に加われなかった。そこで，これらの学生には附属参観とは少し後の時期に地域での参観と報告書の提出，授業内での発表を求めた。

4. 報告及びディスカッションから

初めての幼稚園参観体験を自由な観点で捉えてほしいということと，短時間の体験から多くを学んでほしいということで，どの程度の観点を提示するかに配慮が必要である。本年度は，ほとんどの学生がどの観点についてもびっしりと記述していた。多くの学生が自身の最初の入り方，子どもの年齢による相違，遊びの変化するようす，遊びに生かされる物の準備，保育者の声かけや複数の子どもにかかわることのできるすごさなどを記していた。また，グループディスカッションでは参観していない学生の参加の仕方を工夫し，地域児童施設参観予定の学生たちが司会役を担うこととした。司会役も熱心に質問等しており，体験していない学生の積極的な参加を促し，参観後の学生には客観的に説明のできる場が作られたのではないかと考える。

5. 今後の課題

中学校・高等学校の保育参観は，調整の厳しさから選択となる場合もある。保育学での参観対象の相違を授業にいかす工夫は，こうした中・高校での取り組みとも類似し，有効に機能した面が捉えられた。ただし，地域に出た学生のなかには，施設見学や全体状況について報告し，具体的な子どもとのかかわりは行えなかった学生がいることから，地域の施設選択や紹介という点での課題が残された。

